



企業から見たインターンシップ

東京メトロ(東京地下鉄株式会社)

多くの企業に存在する“総合職”という働き方。変化の激しい現代社会を反映してゼネラリストに対する注目が高まりつつあるが、学生の立場からすると、総合職はどのような仕事をするのか、そしてどのようなキャリアを描けるのかイメージしづらいというのが本音だろう。東京メトロは、その“総合職”にフォーカスをあて、『技術系総合職インターンシップ』を実施している。同社の意図について人事部人事課採用担当課長補佐の佐藤浩樹氏に聞いた。

技術に軸足を置き、 企業経営に貢献する「技術系総合職」

東京メトロが実施しているのは、電気・機械・土木・建築を専攻している学生に向けた「技術系総合職インターンシップ」だ。各分野の専門性を活かしながら活躍する同社の技術系総合職社員の業務や鉄道インフラを支える技術を体感できる5〜7日間のプログラムとなっている。例年、東京メトロでは技術系総合職とエキスパート職(専門職)の2コースで理系人材を採用しているが、インターンシップを実施しているのは技術系総合職のみだ。技術系総合職のみでインターンシップを実施している理由について、佐藤氏はこう語る。「学生にとって、総合職」という働き方はイメージしづらいからです。インターンシップを通じて企業の中核的存在である総合職の存在意義や、活躍フィールド、キャリアについての理解を深めてほしいですね」

技術で総合職という矛盾しているように感じるかもしれないが、具体的な活躍フィールドやキャリアについて聞いていくと決してそうではないことが分かる。「技術系総合職は、専門性に軸足を置きな

から幅広い技術視点に立った経営への貢献を求められます。もう少し具体的に話しますと、新たな構造物を施工したり、設備機器の導入を検討したりする際、自分の専門分野のことだけしか分からなければ、事業経営にとって最適な判断を下すことはできません。電気系で弱電を専攻していたとしても、現場に出ると強電の知識も求められます。ですから、ロー

ーションで様々な業務に携わってもらうことで知識の幅を広げ、最終的には技術的な背景を持って全社的な経営判断ができるようになってほしいと考えています」

同社では、鉄道会社社員として必要な知識を身につけてもらうために、技術系総合職として入社した社員は全員、駅係員から車掌までお客様と最前線で接する、いわゆる「現場」も一通り担当させるといいます。技術系総合職にとっても現場の仕事を理解することは不可欠な要素で、どんな仕事であろうと現場視点は欠かせない。また、技術部門だけでなく投資計画部門などに異動する場合もあり、そこでは技術的視点から工事計画の妥当性や優先順位を判断するといった技術経営的な視点を求められる。

メンテナンスにも創造や革新がある

多くの学生は就職活動をきっかけに、「働く」と真剣に向き合い始める。初めは「周囲がやり始めたから」といった動機でもかまわないが、自分の人生をかける仕事を選ぶ際には、働く動機や仕事選びの軸を真剣に考えなければならぬだろう。「社会の多様性や、仕事の面白さ」を知るきっかけとしてインターンシップを是非活用してください。仕事を選ぶ際に、専攻を活かしたいという理系学生は多いかもしれませんが、専門性ひとつ取っても活かし方は色々あるし、違う切り口での面白さもあります。学生が就活までに学んだ期間は修士でも5年ほどですが、今後30年それだけでやっていけるわけはありません。会社に入ってから学ぶことの方が圧倒的に多いので、あまり先入観にとらわれずに社会や仕事を広く見てほしい。幅広い視野で、自分が本当に楽しめることや打ち込むべき道を見出ししてほしいですね」

理系学生へのメッセージ

早期にインターンシップで良い経験をしていけば、就職活動時期にそれは大きな差となります。早期から「働く」ということと真剣に向き合い、考えることで得られるものはより多くなるはず。インターンシップに参加しただけで満足せず、そこから何を心得、どう成長するかをしっかり意識してください。

東京メトロではインターンシップ期間中に社員とざくばらん話せる機会が数多くありますので、プライベートも含めていろんなことを聞いてみてください。公私共に社会人の姿を知ること、自分の将来像もイメージしやすくなるはずです。

鉄道の仕事についていえば、外から見るとイメージしづらいかもしれませんが、創造性や夢のある魅力的な仕事です。ぜひもっと多くの方にとってほしいですね。

理系学生は忙しい方が多いですが、比較的時間に余裕のある夏にインターンシップに挑戦することをお勧めします。その経験は必ず自分の糧となり、人間の幅が広がるはずです。



技術系総合職の仕事は社員と共に現場で体感できる東京メトロのインターンシップ。期間中はまず座学で鉄道や設備

初日と最終日には、参加者の目の色が違う

た膨大なデータがあり、同社にしかできない研究やノウハウがあるという。その同社が有するメンテナンス技術に対する注目は国内外で高まり続けており、今年からベトナムの鉄道整備事業に参画するなど、これまでに培った地下鉄建設・運営ノウハウの広域展開を推進している。もちろん、土木だけでなく、機電設備や車両などについても日々、東京メトロでは新しい価値の創造に挑んでいる。そんな先端技術の積み重ねと技術革新の繰り返しが支えているメンテナンス技術の最前線を体験すれば、メンテナンスに抱くイメージは大きく変わるだろう。

現場では、目視だけで構造物における問題の兆候を見分けるといった熟練技術者のスキルの高さに感銘を受ける学生も多いという。しかし、佐藤氏はそれ以外にもインターンシップを通じて「鉄道の現場はどんな技術で成り立っているのか、技術者は何を考えているのかを感じ取り、それをどう経営に活かすかまで参加者は考えてほしいですね」と助言を送る。

最終日には、技術系総合職の視点から経営提案をグループワークで発表する。「初日と最終日には、働く、ことに対する



東京メトロ(東京地下鉄株式会社)
人事部 人事課 採用担当 課長補佐
佐藤 浩樹



企業から見たインターンシップ

第一生命

近年、多くの理系人材が活躍するようになった金融業界。とはいえ、理系学生にとって「金融業界にはどのような仕事があるのか」「理系の素養を活かすことができるのか」など分からないことばかりという方も少なくないだろう。そんな理系学生のために、実践型のインターンシップを実施するのが第一生命だ。同社は座学だけではなく、自分で手を動かして業務体験をすることで、学生により深く仕事を理解してほしいと考えているという。プログラムについて第一生命 人事部の水野泉詩朗課長に話を聞いた。

外からは見えない企業の様々な顔を見よう

「生命保険会社の仕事」と聞いて、多くの人が思い浮かべるのは、生命保険を販売する営業職だろう。だが、営業職は氷山の一角。生命保険会社の事業を推進していくために、様々な職種が働いている。

「生命保険会社に対して、営業職、というイメージを持っている人が多いかもしれませんが、第一生命だけでも、お客様から約30兆円のお金をお預かりし、資産運用をしています。それだけの資産を運用するためには、安定して収益を上げられるよう、適切な運用方法を算出する数理モデルを考える金融工学の専門職「クオンツ」の存在が欠かせません。また、保険会社では、適切な保険料率を算出する数理業務のプロ、アクチュアリー、がいなければ保険商品はできません。アクチュアリーやクオンツ人材については、単に数理計算や資産運用の業務をするだけではなく、キャリアアップした後は、経営企画部門をはじめ、リスクマネジメント部門やマーケティング部門、海外事業部門など、キャリア展開のフィールドは非常に幅広い。

このように、生命保険会社では、理系の数理能力を活かせる金融専門職が活躍しています。言うなれば、金融専門職が支えているのは生命保険会社の根幹となる部分。根幹がしっかりしているからこそ、ほかの部門が生きてくるのです」

こう語るのは第一生命 人事部の水野泉詩朗課長。一般にはなかなか知られていない、生命保険会社の内側の仕組みを目で見て肌で感じて理解してもらおうこそ、インターンシップを実施する目的の一つなのだと言う。

「自分で考えて手を動かす」ことにつながる

第一生命がインターンシップを開く目的はもう一つある。学生に就業体験を積んでもらいたい、企業で働く意味を感じてもらおうことだ。「昨今では、大学のカリキュラムも変わってきており、就業について深く考えるようなカリキュラムも増えてきたと感じております。とはいえ、実際に企業の職場に入って社員と触れ合い、就業経験を積めるのはインターンシップしかありません」

そう考えるからこそ、第一生命がインターンシップでこだわっているのは、実際のビジネスに近い体験をしてもらうた

説明するだけでは大学での講義と変わりません。実際に自分たちで考えて、手を動かすことにこだわってプログラム内容を考えています」

アクチュアリー、クオンツの業務を深く体験できる専門コース

手を動かすことにこだわる第一生命のインターンシップ。アクチュアリーコースの場合、昨年は5日間にわたって開催。保険商品を開発する流れについて説明を受けた後、参加者は第一生命が実際に使っている数理モデルを利用しながら、適切な保険料・責任準備金の算出に挑戦。参加者4〜5人に対して現職のアクチュアリーが1人ついて、不明な点が出てきたらサポート。「なぜこの保険料が適切だと考えたか」と商品の収益性なども検証した上で、プレゼンテーションをした。続いては年金アクチュアリーの業務を体験。標準掛金率や退職給付債務などの計算・分析、予定脱退率の計算・分析といったテーマでプログラムは進められた。

プログラム内容で特筆すべきは、生命保険アクチュアリーと年金アクチュアリー、両方の業務について体験できた点。どちらのアクチュアリー業務が自分に向いているか、考えるよい機会になったこ

とだろう。

「アクチュアリーは、保険会社にとって本当に貴重な人材。第一生命にとってのアクチュアリーは、数字を武器に様々なフィールドで活躍するビジネスパーソンだと考えます。数理業務を担当して計算をするだけでなく、経営企画部門や官公庁の対応など、経営に携わる業務を行う者もいます。そういった当社アクチュアリーの活躍するフィールドの広さやキャリアアップについても、インターンシップを通じて感じてほしいですね」

一方、クオンツコースでは昨年、講義を受けてから「株式アクティブ運用ポートフォリオ戦略」「マートンモデルによる倒産予測モデルの構築・シミュレーション」「変額年金の評価」といった課題についてグループで取り組んだ。第一生命が実務で使用しているソフトウェアなどを使いながら、より運用実績を上げられるポートフォリオ戦略や、より精度の高い倒産予測ができる数理モデルについて考察した。こちらも最後に、自分たちが構築したモデルのポイントを現役のクオンツに向けてプレゼンテーション。自分たちのモデルがどれだけ実用に耐えられるモデルに近づけたか、まだ改善が必要なのはどこなところか、フィードバックを受けた。

社員・社内の雰囲気を感じられることも魅力の一つ

「学生さんの中にもトレディングをしている人はいるでしょう。ですが約30兆円もの資金を動かす資産運用は、個人のものとは全然違います。会社としてどのような方針を採用し、どこまでリスクを取って収益を求めることができるのか。企業でお客様のお金を預かって資産運用することの難しさと醍醐味の一端を実感できる内容になっていると思います」

実際に第一生命のインターンシップに参加した学生からは、「カリキュラムや座談会・懇親会を通して、社員と近い距離でじっくりと話すことができてよかった」「社員と直接話してみたことで、WEB情報だけでは読み取れなかった社員の情熱や向上心の高さなどを感じる事ができた」「社内を見学して社員と交流することで、自分の働く姿もイメージできた」といった声が上がっている。

社員と触れ合い、社内の雰囲気を肌で感じられることもインターンの魅力の一つ。「どんな仕事があるか」を知るだけでなく、「どんな会社で、どんな人と働きたいか」という自分の望みを把握するためにも、ぜひこの夏はインターンシップに参加してほしい。

めに、参加学生にアウトプットを意識してもらおうこと。大学の授業では講義を聴いてインプットすることが中心かもしれないが、仕事では様々な場面でアウトプットすることが求められる。

第一生命のインターンシップは、計3コース。生命保険会社の中にある様々な部門の仕事を体験できる「オープンコース」、生命保険アクチュアリーや年金アクチュアリーの業務内容を演習形式で体験する「アクチュアリーコース」、金融工学の専門家としてバイサイドクオンツとしての資産運用業務を体験する「クオンツコース」がある。

「オープンコースでは、当然各部門での就業体験が中心となりますが、まず初めに生命保険ビジネスの全体像を『保障』と『運用』の両面から楽しみながら理解してもらうために、ボードゲームを使ったグループワークに取り組みしてもらいます。そして最終的にはチームでプレゼンテーションをし、理解した内容をアウトプットしてもらいます。理解して、考えて、アウトプット——という一連の流れを体験してほしいですね。

ほかの2コースにしても同じことです。こちらから一方的に会社や仕事のことを

理系学生へのメッセージ

インターンシップに来ていただく学生さんには、「自分は何を体験したいか、何を不得得りたか」と自分の目的意識を持って来てほしいです。学生であっても、期間中は社員と同様に扱います。第一生命の社員は金融業界のプロフェッショナルです。それぞれの分野のプロを身近で感じ、自分もその道のプロと同じように扱われることで、「社会人になったら、どの分野のプロとして活躍していきたいのか」などを考える機会にしてみてください。(水野)

「社会人と一緒に過ごすからには、インターン期間中は気を張らない」と考える方もいらっしゃるかもしれませんが、社会人とは言っても同じ人間です(笑)。「社会に出て働くのは不安だ」と思うのであれば、逆にこのインターンを利用して、「学生のうちに社会人と交流できるいい機会だ」と気負わずに参加してみてください。特に目的意識をしっかり持っている学生さんは大歓迎ですので、参加いただけるのを楽しみにしています。(東)



第一生命保険株式会社
人事部 人財開発室 課長 水野 泉詩朗
人事部 人財開発室 東 優佳



企業から見たインターンシップ

野村総合研究所(NRI)

座学のみ1dayインターンシップから、実際の職場で社員と机を並べて業務体験ができる長期インターンシップまで。インターンシップは「業務体験」の場だが、どこまで実際の業務をリアルに体験できるかはプログラムによってかなりばらつきがある。コンサルティング業界では守秘義務があるため実際のプロジェクトに関われることはまずないが、可能な限りリアリティを追究したインターンシップにこだわるのが野村総合研究所だ。同社のインターンシップについて副主任コンサルタントの梶原氏に話を聞いた。

ありのままの業務体験にこだわったプログラム

経営コンサルティングからITソリューションまでをトータルで手掛ける野村総合研究所(以下NRI)。同社では例年「経営コンサルティング」と「ITソリューション」の2コースでサマリーインターンシップを実施している。経営コンサルティングコースでは5日間(1週間)にわたり、現役コンサルタントの指導のもとで特定企業における経営課題の解決案をチームで検討し、最終日にプレゼンテーションを行う。現役コンサルタントから、業務や成果物についての指導を受けられる貴重な機会といえるだろう。情報収集の仕方ひとつ取っても、同社のライブラリや法人向けビジネス情報データベースなどを活用することができるが、情報量が膨大なゆえに、ベテランコンサルタントと新人では目的の情報を得るための時間効率が数倍も変わるという。そんな現役コンサルタントのノウハウやスキルを身近で見ることができ、具体的な業務内容や求められるスキルについての理解を一気に深めることができるはずだ。

「参加者には、できるかぎりリアルな業務体験をしてほしいと考え、プログラムを企画しています。コンサルティングコースでは、実在する企業に関する課題の解決策を検討してもらうのですが、その課題は対象企業が実際に直面しているであろうものや、これから注目が高まりそうなものを現役コンサルタントが議論して設定しています。このため、課題のリアリティはとても高く、インターンシップ実施後と同じ内容の相談が企業から寄せられたり、メディアに取り上げられたりすることも珍しくありません」この語るのNRIの現役コンサルタントである梶原氏。実際、過去に出題された「電機メーカーにおけるテレビ事業戦略の検討」や、「医薬品メーカーの海外進出戦略の検討」などはその後、大きな話題となった。

「一方、ITソリューションコースでは、約2週間、NRIが手掛ける様々なプロジェクトに実際に参加してもらい、業務体験ができるプログラムとなっている。ITソリューションコースについては、インターンシップ参加者が作成したプログラムや資料が社内でもその後も使用されているケースも珍しくないという。」

「一方、ITソリューションコースでは、約2週間、NRIが手掛ける様々なプロジェクトに実際に参加してもらい、業務体験ができるプログラムとなっている。ITソリューションコースについては、インターンシップ参加者が作成したプログラムや資料が社内でもその後も使用されているケースも珍しくないという。」

「一方、ITソリューションコースでは、約2週間、NRIが手掛ける様々なプロジェクトに実際に参加してもらい、業務体験ができるプログラムとなっている。ITソリューションコースについては、インターンシップ参加者が作成したプログラムや資料が社内でもその後も使用されているケースも珍しくないという。」

仕事だけでなく職場もリアルに体験できる

「同社が言うリアリティとは、仕事内容だけでなく、職場の臨場感も指している。」「インターンシップの企画担当から、指導担当となる現場社員に「こんな指導をしてください」と細かい注文は出しません。現場社員がいつも若手社員と接しているのと同じように指導してもらいます。時には複数の指導担当者で業務に対する意見が食い違うこともありませんが、日常の業務でもいろんな意見をぶつけ合ってゴールを目指していきましょう」

「現場そのものといえるでしょう」

「あえてプログラムを作り込まず、ありのままの環境に参加してもらうことでリアルな仕事の進め方、職場風土を感じてほしいとNRIは考えているのだ。」

「とはいえ、事前のガイダンスで情報収集や資料の作り方、プレゼンの仕方といった基礎的な知識は参加者に伝えられ、期間中も現役コンサルタントがしっかりとサポートする。」「自分に本当にできるのだろうか」と不安に思う方もいるかもしれませんが、過去の参加者からは「コンサルタントのサポートのおかげで質の高いアウトプットにつながられた」など社員

のサポートに高い評価をいただいています。NRIには世話好きな社員が多いので、困ったことやわからないことがあればほとんど社員を活用してください。中には、指導担当を依頼していないのに熱心にアドバイスしている社員もいます(笑)」

「社員との交流を通じて、仕事選びの軸が見えてくる事も」

「そんな気さくな社員と触れ合うことで、仕事だけではなく、「社風や人の魅力を強く感じる事ができた」という感想を語る参加者も少なくないという。」「学生に聞くところ、野村総合研究所という社名から「お堅い社風で、上下関係が厳しい会社なのではないか」といったイメージを抱いている方が多いのですが、実際にインターンシップに来てみて自由度の高さや、風通しよさに驚かれる方は少なくありません。また、「人」や「社風」を知ってほしいとの想いから、期間中に若手からベテランまで様々な年代の社員と参加者が交流できる懇親会などの場を多く設けています」

「いくら良い意見を持っていても、自分の主張ばかりしていたらうまくいきません。チームでの取り組みを通じて、建設的に意見をまとめて実行できるのが重要です。個人個人の力が最大限発揮できればチームとしての力は何倍にもなりますから、チームの中で自分はそのような役割を果たすべきか、意識することの重要性を感じてほしいですね」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」

「仕事だけでなく、業界や会社との適性も意識すべき」



株式会社 野村総合研究所
コンサルティング事業本部 グローバル事業企画室
副主任コンサルタント 梶原 光徳(右)
人事部 採用課
上級専門スタッフ 大久保 慶和(左)

「理系学生へのメッセージ」

「私は最初からコンサルティング業界を志望して就職しました。結果的に適性がある仕事だったと感じていますが、振り返ってみるともともと多くの業界を見て視野を広げてもよかったです。就職活動は、いろんな業界に飛び込んでいろんな仕事を知ることができるといい機会。先入観にとらわれずに、インターンシップでいろんな仕事を体験してみてください。(梶原)」

「ITの仕事といえば、プログラミングを連想する人が多いかもしれませんが、当社ではお客様の事業・業務改革におけるパートナーとして、情報システムの企画・設計から運用・保守まで手がけているので、コンサルティングに近いクライアントの業務分析や業務設計を行うこともあります。ITの中にも様々な業態やビジネスモデルがあるので、インターンシップを通じて多様性を肌で感じ、それぞれの特色や魅力を知ってほしいですね。(大久保)」